
K A I T O 観 察 日 記

柚木あずさ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

K A I T O 観察日記

【Nコード】

N O 6 8 8 E

【作者名】

柚木あずさ

【あらすじ】

K A I T O と暮らし始めて幾星霜。非現実的な現実を前にして、ずいぶん楽しい日々を送っています。V O C A L O I D を知らない方でも楽しめるようになっていきます、たぶん。

朝、目が覚めて真っ先に思い浮かぶ、この言葉。
「うるさい」

私のさわやかな目覚めは、夏休みの朝の苦しい思い出の歌によつてももの見事に粉碎された。しかも転調されてどこか物悲しげな。これはなんぞや。近所の公園でやってる、ちゃめつけあふれるラジオ体操？ 答えは否。ある男が歌っているのだ。

「あ、起きました？」

歌い手は純度100%の苦情にも動じず、にこりと満面の笑みを浮かべた。

「朝から歌うな。近所迷惑、ていうか私が迷惑」

「だって、新しい歌教えてもらって嬉しくて」

確かに教えたさ、ラジオ体操の歌。しかも短調アレンジの方。葬式を思い浮かべてしまうような音楽ではせっかく起きた頭も再び眠りにつかされてしまうようで……ではなく、純粹に不快だコラ。睨みつけてやっても顔の横にクエスチョンマークが盛大に浮かんでそんな顔するし、ああどうしてくれよう、こいつ。

もう春だというのにきっちりまきつけられたマフラー、はにかんだような笑み、くすぐるような甘い声。こいつがいる朝というのに、もずいぶんと慣れてしまった。

やっとこ成人したばかりの女一人暮らしの部屋に男とは何事かあ、と親でなくとも怒鳴りたくなるかもしれないが、こいつに限っては安全だ。

せつめいするとややこしいので適にごまかしたいところではあるが、あれこれ言葉を弄したところで事実是不変。端的に言うと、こいつは人間ではないのだ。VOCALOIDというDTMデジタルオーディオミュージック製作ソフト、つまりは音声合成ソフトであるのだ。歌声だけの口ボ

ツト、といえは話は早い。

21世紀に入ったとはいえ、人間と見まごうようなアンドロイドはまだ発明されていないというのは一般常識なわけで、さらにいえばソースと醤油を間違えるようなドジを踏んでくれるような機械もなかなかない。今一般に普及されているような技術では、0と1でしか物事を処理できないのだ。

こいつも最初はそうだった。血液どころか肉体すらなかった。パソコンにインストールして楽しむ、この世に無数に存在するソフトウェアのひとつでしかないと、今の私だって理解している。

それがだ。

落雷による膨大なエネルギーがパソコンに流れ込み云々、というある種ベタとも言うべき現象によって今現在の状況に持ち込まれたいや、ベタとは思うよ？ だけどそれはアニメやらマンガやらゲームやらの話であって現実を起こるとなると少し勝手が異なってくるものだ。実際、二次元の世界に半分足をつっこみかけていた私ですら あ、遺影になりたい、とかそういう意味ではないのでそこはご安心を その時には軽いパニック状態に陥り、110に電話するか陰陽師を頼るかエージェントを呼ぶのかと、脳みそがショートするのではないかと思うほど多種多様の情報を右往左往させていた。ようやく落ち着きを取り戻せたとき、人間の脳みそがショートするか、と方向のズレた自己ツッコミを入れてしまったくらいだったから、相当な慌てようだったのだろう。

こいつも、あの時は私と同じくらい、いやそれ以上の状態になっていたのだと思う。何せ見ている世界がガラリと変わってしまったのだから。私がマンガやアニメのような二次元の世界に取り込まれたら、まあそれはそれでオタクライフをガチでエンジョイでき……ではなく、下手したら泣き叫びたくなるかもしれない。それをよくもまあ、ここまで順応してくれたのだと野良の通い猫を見つめるエセ飼い主のごとく感心している。

今考えてもあわただしい出会いではあったが、第一声はよく覚え

ている。

「マスター？」

首をかしげるその男。どこから侵入してきたか、とかそう言ったことは問わない。青い髪に、淡い青色のマフラー、そして口元に伸びるインカム、そして腹チラ。復旧した電気に照らされて、画面を隔ててでしか見れなかった男と視線を交わしていたのだ。

落雷時の停電にまぎれてタイミング良くコスプレ野郎が強盗まがい……なんてこたあ考えない。いま求められているのはきつと、ストリートかつ、20年プラスアルファで培ってきた常識にひびを入れる発想だ。あくまでひび。木端微塵に打ち砕いてしまっっては人間としての何か大切なものを失ってしまう。

「もしかなくても…… K A I T O ?」

あ、はい。とあっさり答えてくれた。

よし、決定だ。こいつはボーカロイドだ。常識なんてものはトイレのゴミ箱に捨ててやる。トイレットペーパーの芯と生理用品といっしょくたにして月曜の燃えるゴミの日に出してやるから覚悟しておけ。私の夜明けは近い。

「あの、マスター？」

語尾が上がる独特のしゃべり方は、3次元というVOCALOIDとしての新境地に達したがためなのだろうか。なんにせよ可愛いから許す。

……少し頭を冷やそうか、私。

科学の時代に生まれたゆとり世代としては とういか超常現象と不法侵入者の2択を迫られるとぶっちゃけ後者の方が怖いので 目の前の現実は甘受するでしょう。しかしそれで？ こいつはうちで飼うハメになるんだろうか。ペットじゃあるまいし、だからといって実家からの支援を受けている身ではヒモの存在も許し難い。

どこぞに放り出すか？　しかしこのK A I T O、まとも暮らしていける感じがしない。

ところでK A I T OはK A I T Oで良いのだろうか。K A I T Oは製品名であって個体名ではない。そのままにしておいても一向に構わんが、それはポメラニアンに対してポメラニアンと名付けるようなもので、出来ることならポチとかタローとか名付けてやりたいのが親心というもの。ここはマスターとして新しい名前でも授けてやるべきなのだろうか。google先生に聞きに行くべきか？　それとも知恵袋か？　……いや、ここは民主主義の国・日本。本人の意思を尊重すべきだ。

「あのさ……」

「はい」

沈黙が相当答えたのだろう。満面の笑みを見せてくれた。順応早いなあこいつ。

「K A I T O、でいいんだよね？」

「はい、それが名前ですから。何か芸名を付けてくださるでしたらそれを名乗りますけど」

芸名ねえ……ここで私オリジナルな名前（例：ゴン太、タマ他）をつけてやったらそういうことになるだろう。ええい面倒くさい、K A I T Oで良い。便宜上、他のK A I T Oと区別するべくうちのK A I T Oはカイトと呼んでおくことにしよう。カイトはカイトであってK A I T Oではない。

我ながら言葉遊びにしか思えなかったこの発想ではあるが、意外にも当を得ていたのだから世の中というものは侮れない。世間一般のK A I T Oと、うちのK A I T Oには若干のずれが散見されたのである。

ていうかマスター違ったらずいぶん様変わりするというツッコミもあることにはあるんだが（ボーカロイドには詳細なキャラ設定ないからなあ）、基本バカイトな気がするのは何故だろう。本気の

K A I T O とか卑怯戦隊とかアイスの王子様とかヤンデロイドとか絶対領域とかいろいろいるはずなんだが。まあ、売り場警備員時代もとい売れなかった時代の名残なんだろうかね。

そんな疑問はともかくとして、まず、アイスにさほどこだわりはない（それでもソフトクリームは邪道なんだそうだ）。世間一般のそもそも VOCALOID が一般的な商品であるのかどうかは別の話として K A I T O はハーゲン ツツ命、20円の値上げにもパイと泣きが入るようなやつである。次点でサーティン。

箱アイスで満足してくれるのは非常に助かる。まあ、消費量が尋常じゃないのが玉に瑕なんだが。お腹の心配をしなくて良いせいか、三食アイスなどという荒技をやつてのける。それなんて苦行？ 生物ではないがゆえに食費はかからなくて済むと判明した矢先、懐に冬の兆しが見え始めたのは何もアイスだけのせいではない。私の自制心のなせる業だ。だってカイトが欲しがるんだもん……誰が責められようか。

そして第二。兄弟姉妹という概念がない。ボーカロイドは K A I T O だけでなく、初音ミクや M E I K O、鏡音リン・レンのような存在が、シリーズとして名を連ねる。ファンの間では兄弟姉妹として、または先輩後輩として見るのが主流だ。

カイト自身は同じ会社から発売されたものとして多少の思い入れこそあるらしいが、兄弟姉妹のようだとは言われてみるまで思わなかったらしい。人間で言えばそうですかねなどと新発売の抹茶アイス片手にのんきな発言をしていたのは衝撃だった。

第三に、一見、服に見えるものは体の一部であるらしい。マフラーやインカムのように見えるものは、人間で言うところの皮膚のよくなものであり、取り外し不可とのこと。ネットによく見かける、裸体にマフラー1枚、通称・裸マフラーをさせるといふ野望ついで私を昔ながらのチョコバーを啜えながら心配してくれたカイトは可愛かった。

個人的に残念だったのが、名字だ。初音や鏡音のような名字らし

きもの（公式発表ではコードネーム）が存在するのだ。彼らより前に発売されたK A I T Oにそれがあって悪いことがあるだろうか、いやない。というわけで有力な“名字”始音説”を披露してみたのだが、バニラとストロベリーのマーブルアイスをさらえながら否定するカイトは可愛さあまって100倍の愛しさを喚起してくれたのだ。

そもそもこういうのが現実世界にいるという事実がもともとおかしいのだが、もしかしたらこういうことはよくあることなのかもしれない。外部の人間に事実を伝えようものなら精神病患者扱い、情報を隠匿するならば貴重な超常現象の1つが闇へと葬り去られることになるのだ。どちらにせよその情報はマトモに発信されることはない。意外と、各地のパソコンからK A I T Oたちが飛び出しているのかもしれない。……ふう、私もずいぶんとイカレてきてしまったようだ。

いろいろと新事実を発見しながら暮らしていくのはなかなか楽しい。最初のころとは違い、今はそれほどたいした発見もできないのだが、干物女の典型例である私にとってはイケメンと一つ屋根の下という状況だけでも大変においしいのである。しかもこれが盲目的に慕ってくれているというのだから、それなんて少女マンガ？ といった具合のへヴン状態であることは想像に難くないだろう。

その状況を維持するためのアイスならばと、多少の出費も痛くなくなってきた人間としてどうなのだろうと疑問に思い始めてきたのだが、依然として財布のヒモは緩みっぱなしである。最近なんかカイトも遠慮がなくなってきたり、ああもう、朝からアイスなんてそんなに正露丸のお世話になりたいたいだろうかコイツは（腹痛めたことなんてないけど、なんかイメージ的に……）。

確か、冷凍庫には箱アイスが2種類ほど入っているはずだ。期待

に添えずがつくりとうなだれさせるようなことにやらならんだろう。案の定どれを食べようか迷っている。ハムスターのような後ろ姿が、冷蔵庫をあさりごそごそと動く背中が、両方とも食べちゃえと開き直った表情が！ ブログにでもアップして全世界に晒してやりたいほど可愛い！ 嬉しそうにアイスをはおばるカイトもひとつ可愛い。仮にも男（型）相手に可愛い可愛い連呼するのもいかなものかとは思われるのだけれど。

にしても本当に幸せそうだ。アイス食べてるときが一番楽しそうだ。……こいつらボーカロイドの生き甲斐は歌のはずじゃないんだろつか、製品的な意味で。まあしゃべらせるとい技もある以上、そうとも言い切れないんだが。

「ねえ、カイト、ひとつ聞いて良い？」

「なんですか？」

「アイスと私、どっちが好き？」

うっ、と言葉につまるカイト。アイスを選ぶ手も止まる。ああ、我ながら意地悪な質問をしてしまった。さながら仕事に忙殺される恋人に追い打ちをかける女のごとく、ではなく。回答のもたらす結果を考えればカイトにとっては拷問だろう。

……考えなしに出た発言とはいえ、なかなか面白そうではないか。

アイスへの想いを断ち切り私を選ぶなら、その愛の深さを確かめるべく一時期アイスを我慢させる。断アイス。メタボなカイトなんか見たくないわ！ などという乙女心のなせる業ならまだ可愛げもあるだろうが、アイス禁止令を発動したときのカイトの泣きそうな顔を想像するだけで鼻血が噴き出そうになるというのだから医者もお手上げだ。実際アイスはしばらくおあずけにしよう。アイスなんかと比べて悩む罰だ。となると、泣きついてくるカイトもいずれ見れるわけで。つくづくおいしいな、アイス。ウマウマ。

まあ、マスターたる私を切り捨てアイスに走るようなら解雇解雇にしてやんよ。無論、これは脅しだ。しかしそこはカイトのこと、

平謝りしてくれるんだろうな。……はて、実際K A I T Oをアンインストールしてしまったら、この目の前にいるカイトは消えてしまふんだろうか。うゝむ、試すのは怖いものがあるな。まあ、脅しだしそんなの関係ねえか。

どっちにせよアイスはなし。アイス大好きバカイト君でもその結果については思いめぐらすことはできたようだ。カイトはうんうん悩んだ末に、遠慮がちに唇を動かした。

「え、選べません……」

回答としては上出来かな。冗談だよ真剣に悩むな、と優しく声をかければ晴れ渡った笑顔を見てそれはそれで一興、されどここは追い打ちをかけるが吉と見た。

「へえ、私ってアイスと同列なんだ？」

つくづく鬼畜属性だな、私。微Sであるらしいことは前から意識していたが、今日を境にDSであると認識を改める必要があると思う。そんなことはさておいて、さあカイトよ、慌てふためいてくれたまえ。そしてひざまずくがよい、ふはははは。

しかし、その姿を拝むのはまた次のお楽しみとなってしまうた。カイトは凜とした表情で、怒りさえ含んだような目でまっすぐに私を見据えながら、淀みない声で言いきつたのだ。

「違います」

「……何が、どう、違うわけ」

「だって、どう考えても、マスターと食べるアイスが一番なんです。どっちかなんて選べません。あえて言うなら両方です」

これだからバカは嫌いだ。

っもう、心臓が一瞬止まったかと思ったよ、今！ こんな予想外の可愛い回答を大真面目に言ってくれるなんて、そしてそんなものために悩んでくれていたなんて、嗚呼、神様ありがとう！ この気持ちを世界中のK A I T Oファンと分かち合いたい。そして共に悶えたいっ。

「あの、マスター？」

言葉なく拳を握りしめる私が、怒りにうちふるえているのと勘違いしたのだろう、カイトは少し怯えの入った声をかけてくれる。ああ、カイト可愛いよカイト。

「カイト……」

「はいっ」

「ダッツ、食べる?」

ホント、カイトが来てからというものの緩みっぱなしだ。財布の紐も、固く結ばれていた口元も。

(後書き)

マスター×K A I T Oです。

異議は認めません。作者が「K A I T Oは相手が女だろうが男だろうが総受けだ!」とかほざくやつなんで。

あと、どこかで見たようなものがところどころ混じっている気がするの、気のせいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688e/>

K A I T O 観 察 日 記

2009年3月24日08時59分発行